



TITLE:

『カルメル会修道女の対話』に見る「歴史への参与」：ベルナノスにおける聖性の冒険

AUTHOR(S):

長島, 律子

CITATION:

長島, 律子. 『カルメル会修道女の対話』に見る「歴史への参与」：ベルナノスにおける聖性の冒険. 仏文研究 1984, 14: 106-128

ISSUE DATE:

1984-08-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/137687>

RIGHT:

『カルメル会修道女の対話』に見る
「歴史への参与」
——ベルナノスにおける聖性の冒険——

長 島 律 子

Qui ne voudrait avoir la force de courir cette admirable aventure?
Car la sainteté est une aventure, elle est même la seule aventure.
Jeanne, Relapse et Sainte

序

M. Estève は、『カルメル会修道女の対話』（以下『対話』と略す）の主人公 Blanche は、「歴史に参与したキリスト者の運命（la destinée du chrétien engagé dans l'Histoire）¹⁾」を象徴すると、この作品を扱ったいくつかの論文の中でくり返し述べている。事実、『対話』はベルナノスの文学作品中、最もよく歴史内存在としての人間のあり方を示すものと言えるだろう。

その理由の一つに、この作品が、フランス革命の渦中に実際に起った出来事——カルメル会に属する 16 人の修道女が殉教した事件²⁾——を主題にしていることが挙げられる。『対話』は、歴史の内部に生きている、あるいは、歴史の内部にしか生きることができないという人間の状況と深く係わった作品なのである。

第二の理由は、『対話』が殉教という形での一つの「死」をとり扱っていることである。全編を通じて、死を巡る様々な思想がドラマと共に展開するのであるが、生涯、死について思いを巡らすことをやめなかった作家が、死の直前に、恐らくは自らの死を予感しながら書いた作品であるだけに³⁾ここに含まれる死の問題は、いっそう深刻である。いかなる形にせよ、人間が死ぬということは、人間が時間の制約の中に生きている、即ち歴史の中に限定されて生きていることの最も顕著な証しであると言えよう。

しかしながら、先の Estève の言葉は、ベルナノス自身が「歴史」をどのようにとらえていたかを考慮することによって、再検討されねばならないであろう。ベルナノスは「文学」に没頭するのと同じ程度に、あるいはそれ以上に、「現実」に関心を示した作家である。否、むしろ現実から出発して文学を創造したのであり、彼の作品は観念の産物ではない。二度の大戦をはじめ、世界中に起こる種々の出来事が彼の関心を去ったことは決してなかった。『対話』を執筆したころの晩年のベルナノスは特に、「歴史」についての彼の考えを数多く書きとめている。

この研究では、『対話』の分析を行った後、この作品が、ベルナノスの歴史と人間に対する考え方とどう係わるかを探りたい。

『対話』の分析

『対話』はベルナノスが残した作品の中で、唯一、映画のシナリオとして書かれたものである。⁴⁾ 即ち、彼はこれに基いて映画が制作されることを望んでいたのがあって、この作品の第一の目的は読まれることではなかった。

ここでは、最初に敢えてこの作品を「テキスト」として読むことを通じて、そこに重ねあわされている二つのレベルを別々にとり出し、その後この作品のもつシナリオとしての性格、戯曲性を考慮することにしたい。

1) 『対話』を読む

今、この作品を読むという作業の中で、明らかにしようとしているのは、「限定的レベル」と「神秘的レベル」と名づける2つのレベルである。

第一のレベル、即ち限定的レベルで問題になるのは、登場人物の歴史的、社会的、心理的、性格の要素、さらに遺伝学的要素などである。凡そこれらすべてのものは、人間が現実、具体的なある時ある場所に存在する以上、必ず持っている背景であるが、ベルナノスは登場人物にこれらの背景を持たせて、ずっしりと重い存在感を彼らに与えることに秀でている。これは恐らく彼が少年時代に貪り読んだバルザックから学んだものだろう。現実根ざして人物の輪郭を描いていくというベルナノスのこの側面は、あまり強調されないのが常であるが、今「限定的レベル」と呼ぶこのような次元は、第二の次元、「神秘的レベル」との対比において重要な意味を持つ。

ベルナノスはしばしば「聖性の作家」(l'écrivain de la sainteté)と呼ばれる。しかし、彼は「聖なるもの」という概念を抽象的に描いたわけではない。「ベルナノスの聖人たち」(les saints bernanosiens)と呼ばれる作中人物たちは、聖性を持っていると同時に、全く人間的でもある。聖人たちについて、ベルナノス自身、次のように言う。

Les chrétiens ne sont pas des surhommes. Les saints pas davantage, ou moins encore, puisqu'ils sont les plus humains des humains. Les saints ne sont pas sublimes, ils n'ont pas besoin du sublime, c'est le sublime qui aurait plutôt besoin d'eux.⁵⁾

しばしば「超自然的」と形容される一種の非現実主義、あるいは超現実主義とは、ベルナノスの超自然主義は無縁だと言えよう。彼は最も人間的な人間たちの現実を深く掘りさげたところに聖性を見出している。しかも、それは完全なる聖性であって、永遠なるものへと通じているのである。この、人間存在の根底に横たわる聖性に係わる次元を、この研究では「神秘的レベル」と呼ぼうとしている。

ベルナノスの作中人物はこのような二つの次元の重ね合わせで成り立っているのであるが、それぞれの次元に対応して『対話』に二重の lecture を試みたい。

なお、この作品には、18人の修道女のほかに、指導司祭、Blancheの父、兄らが登場するが、ここでは特に重要な役割を与えられ、作品の主題とも深くかかわる5人の修道女——前院長(Madame de Croissy)、新院長(Madame Lidoine)、Mère Marie de l'Incarnation、Sœur Constance、Sœur Blanche——を主にとり扱う。

A. 限定的レベル

まずこの作品を限定的レベルにそって読んでゆくと、どのようなことが言えるだろうか。

この物語は、一つの宗教団体、即ち Compiègne のカルメル修道会が、革命という特殊な社会的状況の下で、外圧にいかに対応し、また集団の内部にいかなる葛藤があったかを背景に、主人公 Blanche の殉教するまでを描いている。

この作品のほとんどの部分は、修道院の内部でくり広げられる出来事を扱っている。

るのであるが、ベルナノスはまず、この「修道院」という場所が、特殊な聖域、純粹に靈的な祈りの家であって世俗から隔絶しているという一般通念を排除する。そこに生活する修道女たちについても同様である。自らの憶病さを恥じ、「英雄的生活の魅力」(l'attrait d'une vie héroïque)に引かれてカルメル会に入ることを願ったと告白するBlancheに、初めの院長Madame de Croissyはまず、幻想を捨てるよう警告する。

LA PRIEURE

L'attrait d'une vie héroïque, ou celui d'une certaine manière de vivre qui vous paraît — bien à tort — devoir rendre l'héroïsme plus facile, le mettre pour ainsi dire à la portée de la main?...

BLANCHE

Ma révérende Mère, pardonnez-moi, je n'ai jamais fait de tels calculs.

LA PRIEURE

Les plus dangereux de nos calculs sont ceux que nous appelons des illusions...

(II, 1)⁶⁾

修道院に入ることは、人間をそれぞれの生まれから解放することはない。

LA PRIEURE

[...] Vous êtes d'une grande naissance, ma fille, et nous ne vous demandons pas de l'oublier. Pour en avoir renoncé les avantages, vous ne sauriez échapper à toutes les obligations qu'une telle naissance impose, et elles nous paraîtront, ici, plus lourdes qu'ailleurs.

(II, 1)

修道女たちもまた、自らの階級を背負って生きている。初めの院長(Madame de Croissy)、Blanche、Mère Marie de l'Incarnation、Constanceは貴族の出身であり、新院長(Madame Lidoine)は商人の娘である。初めの院長の死後、彼女が非常に重きをおいていたMarie de l'Incarnationではなく、Madame Lidoineが院長に選ばれたのは革命下にあつては院長が平民の娘の方が、政府との摩擦が少ないからだという噂がある。また、他の幾人かの修道女は、農民の出身らしいことも、彼女らの言動からうかがえる。このような個々人の背景が前面に押し出されてくる

のは、貴族階級の是否や革命を巡って一堂に会した修道女たちの自由な会話が展開する第三部第6景である。

フランス史に関するベルナノスの態度を論じた *France dans l'Histoire selon Bernanos* の中で、Alan R. Clark は、大革命に対して全く否定的だったベルナノスが、1938年の *Grands Cimetières sous la Lune* の発表以降、1789年の革命については(93年のものとは区別して)好意的立場に転じたと、述べている。⁷⁾ しかし、この場面では、ベルナノスは革命に対する何らかの政治的見解を述べようとしているのではない。ただ、貴族階級をキリスト教国フランスの精神的指導者として認める主張が、*Sœur Valentine de la Croix*, *Sœur Anne* の口から語られ、一方、貧しい者たちを神の国を継ぐ者であるとする考えが、共和派に好意的な *Sœur Alice*, *Sœur Gertrude* を通して述べられる。彼女らは生身の人間として、それぞれの生活の中から出てきた言葉を語る。人間は、修道院に入ること、自分の家系、自らの根を否定し去ることはできない。修道院は人間に具体性を失わせ、アノニムにする場所ではないのである。

階級の問題と共に、性格と性格とのぶつかりあいも、ドラマを動かすモチーフの一つになっている。

登場人物のうち、最も憶病で、性格の弱いのは、言うまでもなく主人公の *Blanche* であり、逆に最も勇気ある強い性格の持主は *Mère Marie de l'Incarnation* である。*Marie* はこのため、*Blanche* の弱さに対する嫌悪を完全に押えることができない。*Blanche* の弱さが修道会全体の弱みになると考えて、当初 *Marie* は *Blanche* の着衣 (*prise de voile*) に反対する。

MÈRE MARIE

Ce que je sens pour *Blanche de la Force* ne saurait m'empêcher de dire à Votre Révérence que dans les épreuves qui nous menacent, ce manque de caractère peut devenir un péril pour la Communauté.

(III, 3)

しかし、一旦 *Blanche* が入会すると、*Marie* は初めの院長が *Marie* に托していった *Blanche* を、庇護し、励ます義務を忠実に果たそうとする。*Blanche* がパリに逃げ帰って隠れ住んでいるとき、彼女を捜しに行って連れ戻ろうとするのも *Marie* である。

また、新院長 *Madame Lidoine* と *Marie* の間にも深刻な溝がある。二人は出身階級も違うが明らかに性格も違っている。英雄的精神の持主である貴族の末裔の *Marie*

は、困難な時代にこそ殉教者の血が流されることが必要であるとして、殉教を非常に喜ばしい名誉なことと考えている。

MERE MARIE

Que pourrions-nous désirer de mieux que de mourir?

(III, 16)

彼女は修道院の視察に来る人民委員らに高圧的な態度に出て、そのことの招く結果を恐れない。彼女は人民委員の一人に次のような挑戦的な言葉を投げかける。

MERE MARIE

[...] Hé bien, Monsieur, sachez que chez la plus pauvre fille du Carmel, l'honneur parle plus haut que la crainte.

(III, 10)

一方、新院長は、革命政府との軋轢をなるべく避けようとする。彼女は自分たちの身に余るような過度の勇気を警戒する。それは彼女が神への服従を何よりも重んじる謙虚さの持主だからである。彼女は着任の訓辞で次のように述べる。

LA PRIEURE

[...] Ce que vaudra l'époque où nous allons vivre, je l'ignore. J'attends seulement de la Sainte Providence les vertus modestes que les riches et les puissants tiennent volontiers en mépris la bonne volonté, la patience, l'esprit de conciliation. Mieux que d'autres, elles conviennent à de pauvres filles comme nous. Car il y a plusieurs sortes de courage, et celui des grands de la terre n'est pas celui des petites gens, il ne leur permettrait pas de survivre. [...] Méfions-nous de tout ce qui pourrait nous détourner de la prière, méfions-nous même du martyre. La prière est un devoir, le martyre est une récompense.

(III, 2)

新院長とMère Marie de l'Incarnationは、お互いの気質と考え方の違いを初めから意識しているが、それぞれ自分の役目を心得て、正面から衝突することはない。しかし、革命が激化し、カルメルの指導司祭も追われる身となったある日、二人の対立が表面化する。

MERE MARIE

Pour que la France ait encore des prêtres, les filles du Carmel n'ont plus à donner que leur vie.

LA PRIEURE

(*froidement, après un assez long silence*)

Vous m'avez mal entendue, ma Mère, ou du moins vous m'avez mal comprise. Ce n'est pas à nous de décider si nous aurons ou non, plus tard, nos pauvres noms dans le bréviaire. Je prétends bien n'être jamais de ces convives, dont parle l'Evangile, qui prennent la première place et risquent d'être envoyés à la dernière par le Maître du festin.

[...]

LA PRIEURE

Voyons. . . Voyons. . . Le nom de martyr est vite dit. Mais s'il nous arrive malheur. . .

MERE MARIE (*comme malgré elle*)

Votre Révérence ne saurait appeler malheur. . .

LA PRIEUR

Je donne au mot son sens ordinaire, je parle le langage de tout le monde.

(IV, 8)

この出来事の直後、新院長がパリに呼び出されている間に、Marieの指導の下に修道女たちは殉教を誓うことになる。

Constanceの天真爛漫な楽天主義と、Blancheの極端な心配性も対照的に描かれている。陽気で屈託のないConstanceは、死さえも何かしら楽しいことのように考えている。

CONSTANCE

Mon Dieu, Sœur Blanche, la vie m'a tout de suite paru si amusante!
Je me disais que la mort devait l'être aussi. . .

(II, 6)

しかし Blanche は、死を口にすることだに嫌い、Constance が自分たち二人が若くして同じ日に死ぬであろうという彼女の予感について語るとき、非常な困惑を示す。

CONSTANCE

Hé bien... J'ai compris que Dieu me ferait la grâce de ne pas me laisser vieillir, et que nous mourrions ensemble, le même jour — où et comment par exemple, ça je l'ignorais, et dans ce moment je l'ignore toujours... C'est ce qu'on appelle un pressentiment, rien davantage... Il faut que je vous voie maintenant si fâchée contre moi pour attacher de l'importance à... à...

BLANCHE

A une idée folle et stupide! N'avez-vous pas honte de croire que votre vie puisse racheter la vie de qui que ce soit?... Vous êtes orgueilleuse comme un démon... Vous... Vous... Je vous défends...

(II, 6)

以上に見てきたように、修道女たちは皆それぞれに、その人物に固有限界の中に生き、行動している。そして我々がこのレベルにおいては偶然とか運命とか呼ぶところのもの——例えば、院長がパリに呼び出されて一時的に Marie が修道会を指導する立場に置かれることや、Marie が Blanche を捜しに行った留守に、他の修道女たちが逮捕され、死刑の宣告を受けることなどであるが——によって筋が展開し、彼女らの生と死が決定されてゆくのである。

しかしながら、主要人物たちが死に直面してどのような行動をとったかを見てゆくと、第一のレベルで我々が見てきた個人的背景や資質だけでは説明しきれない部分を全員が持っていることに気づかざるを得ない。彼女らの死はそれまでの生からは予測され得なかった形でやって来る。死は単なる生の終止符として彼女らに訪れたのではなかったからである。主要人物たちが、死、あるいは殉教を前にしてとった行動は、第一のレベルで読み進む読者の前に「き裂」として現れてくる。

我々はここにベルナノスのテキストの一つの特色を見ることができよう。彼のどの文学作品を読んでも、我々はそのテキストが閉じた、自己完結的なものでは

ない。即ち開かれたものであるという印象を受ける。彼の創造する世界は決して内部整合性のある小宇宙ではない。先に、ベルナノスが登場人物を描くにあたってバルザック的手法について述べたが、バルザックの小説世界ならば、そこには彼の思想が生み出した原理が働いていて、それが彼の小説世界の秩序となって支配している。小説内部の出来事はこの原理によって説明され得る。もしも、このようなバルザック的な世界を「閉じた」世界と呼ぶならば、ベルナノスのそれは「開いて」いると言えよう。

『対話』においてこの作品を「開かれた」ものになっているのが、次に述べる5人の主要人物における「き裂」なのである。それは人物個人の生にとってのき裂であると同時に、作品の「限定的レベル」で覆われた世界にとってのき裂でもあって、我々にとってはそれが第二のレベルへの入口となるであろう。

B. 主要人物の死に際しての「き裂」

はじめに、病死する最初の院長であるが、彼女は、祈りのうちに過ごした長い謹厳な修道生活と温厚な人柄からは思いもよらぬ醜態をさらして死んでいく。彼女は肉体的な苦痛もさることながら、死の恐怖と孤独とに半狂乱の体で息をひきとるのである。

[...] Désordre. Plusieurs religieuses parlent en même temps. Mère Marie de l'Incarnation répète : "C'EST UNE CHOSE INSENSEE... ON NE DEVRAIT PAS PERMETTRE..." Il est de plus en plus difficile de maintenir à genoux la Prieure mourante. [...] Les lèvres de la Prieure remuent sans cesse. [...] On entend : "DEMANDE PARDON... MORT... PEUR... PEUR DE LA MORT..." A la fin on voit s'agiter de plus en plus le groupe pressé autour de l'agonisante, qui, en dépit de tous les efforts, s'écroule peu à peu sur son lit.

(II-10)

Marie de l'Incarnationは、先にも述べた通り、非常に名誉を重んじる人物であり、心から殉教を望んでいたにもかかわらず、彼女一人が誰もの思わくを裏切って生き残る。彼女はパリにひいて、他の修道女たちが逮捕され死刑を宣告されたという知らせを受けたとき、何としても仲間のもとへ帰ろうとするのだが、指導司祭に

よって厳しくとめられる。

MERE MARIE

Je suis déshonorée!

LE PRETRE

Voilà le mot que j'attendais! Oh! je ne le condamne pas! Il est bien chez vous le cri de la nature à l'agonie. Voilà ce sang, oui, voilà ce sang que Dieu vous demande, et qu'il vous faut verser! Vous auriez donné avec joie celui qui coule dans vos veines, vous l'auriez versé comme l'eau. Mais chaque goutte de celui-ci vous arrache plus que la vie!

(V, 16)

Marie があれほど重んじていた名誉、司祭は、それこそが神が彼女に求める殉教の血だと悟す。要するに、他の者たちにとって死ぬことが殉教であると同様に、Marie にとっては名誉を失って生きることが殉教だったのだ。

新院長 Madame Lidoine の場合に移ろう。彼女は Marie とちがって敢えて殉教を望んではいなかったし、彼女自身は修道女たちが殉教の誓願をたてたときには留守で、誓いに加わっていない。というより、むしろ、彼女が留守でなければ、誓願は行われなかったにちがいないのだ。彼女は謙虚に、一見凡庸とも思える態度を貫いたのであるが、結果は意外にも、彼女がいわば贅沢な望みだと考えていた殉教に至ることになる。

また年若い Constance は、ベルナノスの非常に重んじた「幼子の精神」(l'esprit d'enfance) を以て無邪気に生を享受しており、死をも生と同様に喜んで受け入れると思われた。子供が両親に信頼を置くように、神に絶対の信頼を寄せていた Constance は、最も素直に死に趣くことができるかのようであったが、その彼女が殉教の誓いに反対票を投ずる。つまり、彼女もまた殉教を前にして予想に反する行動をとったことになる。

最後に主人公の Blanche の場合を考えよう。彼女は不安の中にありながらもいくつかの危機をのり越える。兄の Chevalier de la Force が修道院を出るよう説得に来たときも、人民委員が修道院内を視察に来て Blanche を「解放」と言いつつひどく脅えさせたときも、彼女はなんとか窮地を脱することが出来る。しかし、その影では Marie de l'Incarnation の保護が彼女を支えていたことは否めない。が、

殉教の誓いの直後には、強いられてきた極度の緊張のため精魂つき果てて修道院から逃げ出してしまう。父を断頭台の上に失った後の彼女はますます憶病になってもとの自分の屋敷で召使いとして隠れ住み、彼女を連れもどしに来た Marie と共に帰ることも拒否する。ところが彼女は全く唐突に最後の場面に、つまり断頭台の下に群集の中から現われて殉教するのである。

On ne voit que la base de l'échafaud, où les Sœurs montent une à une, chantant toujours, mais à mesure qu'elles disparaissent le chœur se fait plus menu. Plus que deux, plus qu'une. Mais à cet instant, partant d'un autre coin de la grande place, une nouvelle voix s'élève, plus nette, plus résolue encore que les autres, avec pourtant quelque chose d'enfantin. Et on voit s'avancer vers l'échafaud, à travers la foule qui s'écarte, interdite, la petite Blanche de la Force. Son visage semble dépouillé de toute crainte.

(V, 18)

このように5人の殉教、あるいは死に対する態度は、そのどれもが意外性を含んでいるのである。このことが第二のレベル、即ち、我々が「神秘的レベル」と呼ぶところのものへの導入口である、と先に述べた。それは、この5人の修道女たちの辿った運命が、作品外の一つの事、つまりキリストの死を指しているからである。⁸⁾

C. 神秘的レベル

病死した初めの院長が孤独と恐怖を訴える言葉の「神が私たちをお見棄てになる！」(Dieu nous délaisse! Dieu nous renonce! » (II, 9) という表現はキリストの十字架上の言葉「わが神、わが神、どうしてわたしをお見棄てになったのですか。」(« Mon Dieu, mon Dieu, pourquoi m'as-tu abandonné? »)⁹⁾と酷似する。さらに、看病に当たる Marie が、苦痛にやつれた彼女の顔つきを、「ゲッセマネの園における主の御顔のようです。」(« C'est peut-être celui de notre doux Seigneur à Gethsémani. » (II, 9))と表現する。このことから、初めの院長の死とキリストの死との緊密なアナロジーが顕わになる。

名誉を重んじていた Marie は、一人生き残ることによって名誉の放棄という形の殉教を行ったが、これは栄光を棄て、恥を忍んで死に至ったキリスト¹⁰⁾を思わせる。

名誉を求めず、ひたすら従順であったが、結果的には殉教の榮譽を被った新院長の場合は、死に至るまで従順であったキリスト、それゆえに高く挙げられたキリスト¹¹⁾を示す。

殉教を一度拒んだ Constance は、一度は「苦い杯」がとり除かれることを神に願ったキリスト¹²⁾を表わしている。

そして Blanche は、彼女の修道名の示すようにキリストの死の苦しみ (L'Agonie du Christ)——それは彼女の場合、肉体的なものよりも、精神的なもの、即ち、死の恐怖であったのだが——を身に帯びつつ死に赴く。

このように、各々の修道女の死は、何らかの意味でキリストの死とのアナロジーを持っている。

しかし、先に述べた5人の修道女の死を前にしてのき裂は、我々をもう一つ別の認識にも導く。それは、修道女たち相互の役割の交替ということである。

病死した初めの院長と Blanche との役割交替はもっとも顕著である。院長はかつて Blanche の選んだ修道名 l'Agonie du Christ と同じ修道名を選ぼうとしたのだが、当時の院長から考え直すよう推められ、その名を名乗ることができなかったという経験がある。そのため彼女は、Blanche が自分に代って「キリストの聖なる苦しみ」のしるしの下に置かれていると信じる。

LA PRIEURE

[...] Dès notre première rencontre, en m'avouant le nom qu'elle avait choisi, Blanche de la Force s'est placée pour moi sous le signe de la Très Sainte Agonie.

(II, 7)

その院長が苦しんで死んだのは、Constance によれば、小さすぎる服に袖を通せないように、彼女が自分の寸法にあわない他人の死を死んだからで、その代りに別の誰かが易々と死ぬことができるようになるためだったのだ。

CONSTANCE

[...] Qui aurait pu croire qu'elle [la Prieure] aurait tant de peine à mourir, qu'elle saurait si mal mourir! On dirait qu'au moment de la lui donner, le bon Dieu s'est trompé de mort, comme au vestiaire on vous donne un habit pour un autre. Oui, ça devait être la mort d'une

autre, une mort pas à la mesure de notre Prieure, une mort trop petite pour elle, elle ne pouvait seulement pas réussir à enfiler les manches...

BLANCHE

La mort d'une autre, qu'est-ce que ça peut bien vouloir dire, Sœur Constance?

CONSTANCE

Ça veut dire que cette autre, lorsque viendra l'heure de la mort, s'étonnera d'y entrer si facilement, et de s'y sentir confortable...
(III, 1)

このConstanceの言葉は、後に、あれほど死を恐れていたBlancheが自分から断頭台の下に駆けつけることにより、現実のものとなる。

Blancheは一方、Marieとの間にも役割がある。Marieと院長がBlancheの弱さについて語り合っているとき、次のようなやりとりがある。

LA PRIEURE

[...] C'est vous, ma fille, qui serez sacrifiée à cette faiblesse [de Blanche] et peut-être substituée à ce mépris.

MERE MARIE

J'y consentirai de bon coeur.

(III, 16)

つまり、Marieが殉教を果たせなかったのは、彼女がBlancheの身代りとなって本来のBlancheの立場と置き換えられたからだという見方が成立する。

また、殉教の誓いの際に、Blancheがとると予想された態度をとったのはBlancheではなくConstanceであった。殉教の誓願を全員で立てるべきかどうか、投票で決することをMarieが提案するが、その際、一票でも反対票があれば中止するというとり決めがされる。修道女らが票を投じているとき、ある修道女がBlancheを指して、「きっと一票だけ反対がある。」とささやく。開票の結果、実際一票だけ反対が

あるのだが、それは **Blanche** のものではなく、**Constance** のものだ と判明する。

MERE MARIE

Il y a une seule opposition. Cela suffit.

Sœur Constance est pâle comme une morte.

SŒUR SAINT-CHARLES (*tout bas*)

On sait laquelle...

SŒUR CONSTANCE

Il s'agit de moi.

Stupéfaction générale. Blanche commence à pleurer, la tête dans ses mains.

(IV, 13)¹³⁾

ここでも **Blanche** と **Constance** の役割交替が認められる。

新院長は、自らは殉教の誓いを立てていないのであるが、法廷で尋問されるとき殉教を誓ったのであるから自己を弁護してはならないのではないかと不安を懐く他の修道女たちから、誓願の責任をとり除いて、自らそれを負おうとする。

LA PRIEURE

[...] Hé bien, j'assume ce vœu, j'en suis désormais responsable devant sa Majesté [Dieu], je suis et serai, quoi qu'il arrive, seule juge de son accomplissement. Oui, j'en prends la charge et vous en laissez le mérite, puisque je ne l'ai pas prononcé moi-même.

(V, 12)

誓いを立てたものと、立てなかったものとの間に交替がおこっている。

新院長はまた、逮捕されたとき留守だった **Marie** の代理を果たしたことにもなる。なぜなら殉教者の先頭に立つことは、**Marie** の望みであり、勇敢な彼女はそれに最も適任だと思われたからである。が、牢獄の中で新院長は、**Marie** の役割を自分が務めることになったと、修道女たちに告げることになる。

LA PRIEURE

[...] Je puis désormais n'en prendre que la part qui me revient, et encore devrais-je revendiquer humblement au nom de notre admirable

Mère Marie de l'Incarnation, car c'est de sa part que je dispose, quoique indigne.

(V, 14)

このようなパラドクサルな役割交替は、我々が第一のレベルで読むとき、つまり、ただ単なる人間相互の問題として読むときには、意味を発生しない。一人の人間が他の人間の受けるべきものを受けたように見えるということ、それを偶然と呼ぼうと宿命と呼ぼうと、この事柄に意味を付与するわけではないからである。人間相互の役割交替は「キリストの贖罪の死」を媒介にしてのみ意味を持つ。なぜなら、キリストの死が、他の人間の受けるべき分を代って受けた例の最たるものだからである。つまり、ここで問題になっているのは、原罪によって死すべく定められた人間に代ってキリストが死に、人間に救いがもたらされたという教義である。従って、人間同士の役割交替は、当の人間たちがキリストにおける交り、即ち *« communion »* の中に入れられていると仮定して初めて *« réversibilité »* となることができるのである。

個々の修道女の殉教、あるいは死が、キリストの死と何らかの類似性をもつこと、彼女ら全員が、キリストにおける *« communion »* によって *Corps mystique du Christ* として殉教に至ったと考えられること、この2つの事によってここに『対話』を「キリストの死」という、作品外部の *référence* をもつものとして、いわば「キリストの受難劇」として読むという第二の *lecture* の可能性が開かれる。キリストを指し示す修道女たちが、本来の意味での *martyres*、即ち、キリストの証人だということができよう。

2) 戯曲性を通しての二つのレベルの統一

これまで、二つの異なる次元における二通りの読み方で『対話』を読んできたが、次にこの作品の戯曲性という面から二つのレベルの統一について考えてみたい。

すでに述べたように、『対話』はベルノナスが残した唯一の映画のシナリオである。しかし、完成直後には、映画には不向きであるとして制作されるには至らなかった。1949年に Albert Béguin がマニュスクリから現在の形に整えたものを出版し、演劇として成功を修める。現在 *« Le Dialogue des Carmélites »* として見ることができる映画は、1960年に Brückberger と Philippe Agostini が制作したものであるが、ベルノナスの残した作品をかなり改竄したものであって、彼のシナリ

オの映画化とは言えない。

ここで問題にするのは——仮にベルナスのシナリオに忠実な映画が作られたとして——できあがった映画ではなく、『対話』の台本としての性格である。

言うまでもなく台本は、台詞とト書きから成り立っていて、それは、生身の人間、つまり俳優がそれに従って語り、動作をすべきものである。即ちそこでは、現実に関え、あるいは見える具体的な実体の指示だけがあるのみであって、登場人物は、その本質について何ら説明を加えられてはいない。人物の行動には何の注釈も加えられず、全知の語り手による解釈もない。登場人物は、*présence* としてのみ現れてくるのである。

従って、我々の試みた二つのレベルによる *lecture* は、どちらも可能性として二者同時に存在しつつ、統合された形で実現してゆくのである。二つの次元は、そこに重ね合わされているのだ。

例えば、Constance は、後になって実際に起こる Blanche に関する出来事を「予感」として語っているのであるが、彼女の予感的の中は単なる偶然とも、神が彼女に与えた超自然的な予見の力のためともとることができる。Constance が最後に予感について語るのは牢獄においてである。彼女は Blanche がきつと戻ってくると、確信を持って言う。

SŒUR CONSTANCE

Elle reviendra.

SŒUR SAINT-CHARLES

Comment donc êtes-vous si sûre, Soeur Constance?

SŒUR CONSTANCE

Parce que ... (*elle s'arrête déconcertée*) parce que ... (*puis très confuse, mais incapable de revenir sur ce qu'elle a dit.*) A cause d'un rêve que j'ai fait.

On rit.

(V, 12) (強調は筆者)

彼女の「予知能力」はこのように ≪ *On rit* ≫ によって相対化されてしまう。Constance 自身の台詞の中に「でも、私たちが偶然と呼ぶものは、もしかすると神にとっては理屈にあったことなのではないでしょうか。」(≪ *Mais, ce que nous*

appelons hasard, c'est peut-être la logique de Dieu? ») という言葉があるのは興味深い。彼女は、作品全体を別の色合いで見せるような光——第二のレベルを示唆するような光——をときおり放ちながら、常にまた単なる年若い修道女という位置にとどまるのである。

ベルナノスは、ミステックな次元を第三にも否応なく認めさせるような決定的で強引な形では描こうとはしない。そして、そのためには、このシナリオというジャンル、つまり登場人物の語る台詞のみで構成されている作品の形式は非常に好都合だったと言わねばならない。神秘的な次元の存在は、本人の意識にさえ上らないかもしれないけれども、それぞれの現実の人間存在の内奥に隠されているというのがベルナノスの考えである。従って、テキストとしての『対話』の二重性はパウロの言う肉と霊を持つ人間の二重性、つまり地上に属するものでありながらすでに天にも属するという人間の二重性に対応し、シナリオとしての『対話』の統一性は、人間の実存としての統一性に対応すると言えるだろう。

結 論

第二次大戦直後の1945年から彼が世を去る48年までの4年間——『対話』の執筆期間(1947～48)を含むこの間のベルナノスの講演、新聞に発表した論説などは、エッセイ集 *Français, si vous saviez, Liberté pour quoi faire?* として編まれている。そこからは、ベルナノスの「歴史」に関する一つの態度を窺い知ることができる。彼が一貫して攻撃を加え続けているように見えるのは、決定論的な歴史主義に対してである。特に戦後の世界は彼の目に危惧すべき動向を示していたようである。一方でヘーゲル-マルクスの流れをくむ歴史主義を退け、他方で資本主義社会をも否定する。

Pour Hegel ou Marx, je suppose, celle de la *gravitation* sociale, — si j'ose m'exprimer ainsi, — ne devait retarder ou hâter en rien le cours de l'Histoire, aussi déterminé que *le cours des astres*.¹⁴⁾

Le sort de la liberté est lié au sort de l'homme libre, la liberté c'est l'homme libre. Car nous savons tous que, par un paradoxe étrange, c'est

au nom du libéralisme que le capitalisme naissant sacrifiait l'homme libre à ce même impitoyable déterminisme des choses que nous dénonçons dans le marxisme. En faisant de la société *une simple machine à produire*, il la vidait, par exténuation, des forces spirituelles indispensables pour la maintenir à un certain niveau d'humanité, pour la maintenir humaine.¹⁵⁾ (強調は筆者)

ベルナノスがこれらの主義や社会体制を糾弾するのは、彼がそれらのうちに人間の自由意志の働く余地の全くない決定論を見ているからである。彼は例によって、豊富なイマージュを用いてこのことを表現している。上の引用中の「gravitation」, « cours des astres », « machine à produire »をはじめ, « locomotive lancée sur des rails »¹⁶⁾, « grand fleuve »¹⁷⁾, « liquidation du cadavre »¹⁸⁾ などがそれである。これらは一定の方則に従って運動する一種の自動機械、止めることも進めることも、方向を変えることもできない運動である。彼は人類の歴史をこのようなものとして捕らえる風潮が世界に蔓延し、人々が——特にキリスト者が——この考え方を当然のごとく受け入れることに苛立ちを覚えていたようである。

しかしベルナノスは歴史そのものを否定しているわけでは毛頭ない。彼は、決定論的な歴史に、人間の自由の介入し得る歴史を対置しているのである。

Mais les formidables équations du déterminisme historique recèlent une insignifiante erreur de calcul qui fausse tous les résultats. Ou encore, si l'on préfère, dans l'énorme appareil des effets et des causes, la liberté de l'homme, à peine vérifiable il est vrai, joue *le rôle de ces produits de la sécrétion endocrinienne* si difficilement décelables eux aussi, à l'examen le plus attentif, et que pourtant expliquent seuls certaines perturbations profondes auxquelles l'ancienne médecine donnait, avec tant de vraisemblance, des explications mécaniques.¹⁹⁾ (強調は筆者)

しかし、歴史の中に働く人間の自由は、「内分泌物」のように確かな機能を持つてはいるが捕らえがたいものと言う。しばしばあまりにも安易に用いられ、あらゆる政治体制、思想によってそれぞれ異なる意味付けをされてきたこの「自由」という言葉でベルナノスは正確には何を表わそうとしているのだろうか。マルクス主義

にも資本主義にも自由がないとする彼の使用する言葉に何らかの政治的色彩を見ようとしても無駄であろう。彼が「自由」という語を使うのは、極めて *spirituel* な意味においてである。

Liberté pour quoi faire? の中で彼は自由の意味を執拗に問い続けている。下の4つの引用文から我々は「自由」と「愛」さらには、「愛」と「神の像」というベルナノスの思想の連関をたどることができる。

Le scandale de l'univers n'est pas la souffrance, c'est *la liberté*. Dieu a fait libre sa création, voilà le scandale des scandales, car tous les autres scandales procèdent de lui. [. . .] Il y en a à ce moment, dans le monde, [. . .] tel pauvre homme qui [. . .] remercie le bon Dieu de *l'avoir fait libre, de l'avoir fait capable d'aimer*.²⁰⁾

Au cours de cet entretien je vous disais que le scandale de la création n'était pas la souffrance mais *la liberté*. *J'aurais pu aussi bien dire l'Amour*. Si les mots avaient gardé leur sens, je dirais que la Création est un drame de l'Amour.²¹⁾

Et par exemple, ils [les opérateurs] le [l'homme] tiennent pour un animal industrieux, soumis au déterminisme des choses, et néanmoins indéfiniment perfectible. Mais si l'homme était réellement créé à *l'image de Dieu*? Qu'il y ait en lui une proportion quelconque, si petite qu'on la suppose, de *liberté*, à quoi donc aboutiraient leurs expériences, sinon à la mutilation d'un organe essentiel?²²⁾

Nous sommes créés à *l'image et à ressemblance de Dieu*, parce que nous sommes *capables d'aimer*.²³⁾ (強調は筆者)

ベルナノスにとっての自由とは、創造以来人間が神から与えられているもので、「愛することができる自由」に他ならない。そしてそれこそが、人間が「神の像」として創られているということの意味なのだという。彼は聖人たちは「愛の才能」(≪ *le génie de l'amour* ≫)を持っていると言う。しかしそれは限られた人間に与えられる特権を持っているという意味ではない。彼は、ここでもイマージュを用

いて、聖人とは、誰もが自らの内に持っている命の水の井戸から水をほとばしり出させることを知っている人間のことだと表現する。その井戸は表面を枯葉やくずで覆われていてそこからは死の臭いが立ちのぼっているのであるが、その層の下には「命の水」が湛えられており、そのさらに深いところにはどんな純粋な水より純粋な創造以前から存在する光——即ち、キリスト——がある。²⁴⁾

ベルナノスの好んで用いるもう一つのイマージュ「表層—深層」(《surface-profondeur》)²⁵⁾と同様、この表面を芥の層で覆われた井戸は、この研究で述べてきた人間の二重の状況を表わしていると言えるのではないだろうか。《肉—霊》あるいは《限定された存在—永遠の存在》というこの二項は、ベルナノスの作品の至るところに見出される。

しかしこれらの二項は単に対立しているのではなく、具体的な個々の人間がその両者を合わせ持ちながら現に生きていると、彼は考える。死すべき人間、歴史の中に限定されている人間が、自らの深みへと降りてキリストに出会うことによって、永遠なるものに連なるのである。だが、どうして「自らの深み」にキリストを見出しうるのか？ いったい、いつから人間はそのような存在になったのか？

Ceux qui ont tant de mal à comprendre notre foi sont ceux qui ne se font qu'une idée trop imparfaite de l'éminente dignité de l'homme dans la création, qui ne le mettent pas à sa place dans la création, à la place où Dieu l'a élevé afin de pouvoir y descendre.²⁶⁾

歴史を超越した永遠の存在である神の子キリストが、歴史のただ中に突入して人間となったことによって、人間を神の子の高みにまで引き挙げた——それは世の始めからの神の救いの意志によるのであり、人間は創造されたとき以来「神の像」を持つと、ベルナノスが言うのはそのためなのである。

Chrétien engagé dans l'Histoire ——冒頭に引いた M. Estève のこの言葉にもう一度立ち戻ろう。この言葉は、Blanche のみならず、16 人の殉教者と Marie de l'Incarnation の全員に当てはまる。彼女らは、意識的にせよ無意識的にせよ、キリストに出会ってその証人となったからである。即ち、彼女らは歴史を変えたのである。どのように変えたか、それは知ることができない。ベルナノスの霊的な指導者であったレオン・ブロワならば、神の国の到来を早めたと表現したかも知れないが。我々に明らかなのは、彼女らが参与した歴史は神の救いの計画に基いた「救済史」

であり、そこには再臨(*parousie*)がすでに予見されているということである。

ベルナノスの聖人たち, *les saintes bernanosiennes* — 『対話』の登場人物たちは、この名で呼ばれるのに最も応しい。なぜなら彼女らは、「神の愛の中に自己を実現した」²⁸⁾からであり、「聖性の冒険」に生き、そして死んでいったからである。

註

- 1) ESTEVE, Michel *Métamorphose d'un thème littéraire à propos des Dialogues des Carmélites, Etudes Bernanosienne* 2, 1960, p. 55.

Cf. —, Note sur Les Dialogues des Carmélites in *Œuvres romanesques Bibliothèque de la pléiade*, Gallimard, 1974, p. 1920.

—, Bernanos, Hachette, 1981 p. 276.

- 2) M. Estève の *Pléiade* 版の註(前出)によれば、この事件は以下の通りである。

1794年7月17日(これは、恐怖政治の終る10日前である)、殉教の誓いをたてた16人のCompiègneのカルメル会の修道女が、革命裁判所によって死刑を宣告され、即日パリTrône広場において処刑された。逮捕の時パリにいた *Sœur Marie de l'Incarnation* だけが免れ、カルメル会の歴史を綴った *La Relation* という書物にこの殉教のことを書き残した。1906年、これらの殉教者たちは、教皇ピオ10世によって列福せられる。

ベルナノスは、この事件を題材にした、ドイツの女流作家 Gertrud von Le Fort の小説「断頭台の最後の女」(*Die Letzte am Schaffot*)をもとに映画のシナリオを書くようにというBrückberger師の依頼により、『対話』を執筆したが、この作品はLe Fortの原作に大幅に変更を加え、あるいは加筆するなど、ベルナノス自身の自由な着想によって書かれたものである。

- 3) ベルナノスがチュニジアで『対話』を執筆したのは1947年の冬から1948年の3月半ばにかけてであるが、そのころ彼はすでに肝臓ガンに犯されており、この作品を完成したちょうどその日から死の床に臥すことになる。パリに運ばれるが、同年7月5日に世を去っている。
- 4) ベルナノスは映画には強い関心を寄せ、好んで映画を見ていたことが知られているが、『対話』以前にシナリオを手がけたことはなかった。

- 5) *Nos amis les Saints* in *La Liberté pour Quoi Faire?* Collection Idées, Gallimard, 1972; p. 228.
- 6) II, 1 は ≪ Deuxième tableau, Scène un ≫ の略。『対話』からの引用は以下同様に示す。
 テキストは下の版を使用した。
Dialogues des Carmélites in *Œuvre romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, 1974, Gallimard
- 7) Alan R. CLARK; *La France dans l'Histoire selon Bernanos*, Minard, 1983, pp. 85–103.
- 8) Josef PFEIFER *La passion du Christ et la structure de Dialogues des Carmélites, études bernanosiennes* 3/4, 1963, pp. 139–169 の中で、人物に具現したキリストの受難について、ここにとりあげたものとも一部共通する指摘を数多く行っている。
- 9) マタイ 27, 46; マルコ 15, 34.
- 10) ピリピ 2, 6–7 「キリストは、神のかたちであらわれたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえっておのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。」この聖句はキリストの神の子としての栄光の放棄、卑下、即ち人間となったことを表わす。Marie の修道名 Incarnation は、まさにこのことを示す名であるのは興味深い。ただし、Marie de l'Incarnation は実在の人物であって（註(2) 参照）、ベルナノスがこの名を与えたのではない。Le Fort の小説では、生き残った Marie に、アルザス生まれの司祭が、ドイツ語で、≪ Marie von der Menschwerdung（人間となること）≫ と呼びかけたとき、名前の意味が、いっそうはっきりしたと書かれている。これは上述のことと関係すると思われる。
- 11) ピリピ 2, 8–10.
- 12) マタイ 26, 39; マルコ 14, 36; ルカ 22, 42.
- 13) Constance はこの直後自分の反対票を撤回する。それによって、全員が殉教を誓うことになる。
- 14) *La Liberté pour Quoi Faire?* Collection Idées, Gallimard, 1972, p. 183.
- 15) *Ibid.*, p. 187.
- 16) *Ibid.*, p. 135.
- 17) *Ibid.*, p. 201.

- 18) *Ibid.*, p. 154–5.
 19) *Français, si vous saviez*, Gallimard, 1961, p. 210.
 20) *La Liberté pour Quoi Faire?* (前出) p. 224.
 21) *Ibid.*, p. 230.
 22) *Ibid.*, pp. 124–5.
 23) *Ibid.*, p. 229.
 24) *Ibid.*, p. 229 以下は「井戸」の比喩の原文。

Les saints ont le génie de l'amour. Oh! remarquez-le il n'en est pas de ce génie-là comme de celui de l'artiste, par exemple, qui est le privilège d'un très petit nombre. Il serait plus exact de dire que le saint est l'homme qui sait trouver en lui, faire jaillir des profondeurs de son être, l'eau dont le Christ parlait à la Samaritaine: Ceux qui en boivent n'ont jamais soif... Elle est là en chacun de nous, la citerne profonde ouverte sous le ciel. Sans doute, la surface en est encombrée de débris, de branches brisées, de feuilles mortes, d'où monte parfois une odeur de mort. Sur elle brille une sorte de lumière froide et dure, qui est celle de l'intelligence raisonneuse. Mais au-dessous de cette couche malsaine, l'eau est tout de suite si limpide et si pure! Encore un peu plus profond, et l'âme se retrouve dans son élément natal, infiniment plus pur que l'eau la plus pure, cette lumière incréée qui baigne la création tout entière — en Lui était la vie, et la vie était la lumière des hommes — *in ipso vita erat et vita erat lux hominum*.

- 25) *Journal d'un Curé de Campagne*, in *Œ I*. p. 1115.
 26) *La Liberté pour Quoi Faire?* (前出) p. 229.
 28) *Ibid.*, p. 225.